

経験世界に〈理想〉を見出す批判

——実践的批判理論のために——

京都大学 鈴木起生

1. 目的・方法

既成の秩序や構造に潜む不可視の権力作用を指摘し解体する批判理論は、社会学の理論的系譜のなかでも重要な位置を占めてきた。本報告では、こうした批判・解体の先にある批判理論と経験的なものとの関わりについて、特定の研究者の実践を例にとりて論じる。そこにおいて社会批判を志向する「実践としての理論」は、具体的な歴史・社会条件下における経験世界に対する、批判的介入の実践として現れる。こうした考えから、本報告ではレバノン生まれの人類学者・社会学者でありオーストラリアの多文化主義研究で知られるガッサン・ハージの研究をとり上げ、彼の社会批判論を内在的に論じるだけでなく、それが経験世界にどのように切り込んでいこうとしているかを明らかにしたい。ハージをとり上げるのは、彼がフィールドワーカーとして経験世界に携わるなかから、つねに実践的な批判意識をもって経験世界と切り結ぶ理論的営為を続けてきたため、批判理論と経験的なもの関わりを論じるうえで1つのモデル・ケースになりうるからである。

2. 結果・結論

近著 *Alter-Politics: Critical Anthropology and Radical Imagination* (2015) において、ハージは自身のフィールドワーク経験の省察を基礎として、オルタ (alter) 的批判という批判様式を提起した。ハージは批判的思考が作動する仕方に注目し、これを2つの思考様式に区別する。1つは既存の現実を否定するアンチ (anti) の思考様式、もう1つが既存の現実から自由な別様の可能性を求めるオルタの思考様式だ。だが既存の現実の否定と〈理想〉の希求という、批判的思考における2つのモメントを分析的に取り出す視点を与えるだけなら、オルタ論の独創性はさほど認められない。従来の社会批判論に比してオルタ論が新しいのは、現在の経験世界を否定した先に〈理想〉があるとするのではなく、現在支配的な「現実」認識によって覆い隠されている潜在的な現実を、オルタナティブとして発見するという考え方である。いわば顕在的な「現実 version.1」を、潜在的な「現実 version.2(3,4,...)」を準拠点として批判するのが、オルタ的批判の核心なのである。この考え方によって、ともすれば現在の経験世界を分析する視野を狭めてしまう、という批判的思考の落とし穴を回避し、いまここにある現実により積極的な意義を見出しうる視野の広さが担保される。ではこうした社会批判論は、ハージのいかなる実践的問題意識から育まれてきたのか。一言でいえばそれは、人々が互いに否定しあう排他的状況からいかに抜け出し関係性を改善しうるか、という問題意識である。レバノンのキリスト教政治共同体が内戦時の排他的戦闘性をもつにいたる経緯を追った初期の研究から、オーストラリアの多文化主義と排他的ナショナリズムの相補的關係に関する批判的研究、「テロとの戦い」以降混迷の度を増す現代世界の自由民主制に対する今日の批判的議論まで、ハージの研究関心はつねに排他的關係性の批判と再想像に向けられてきた。否定が否定を生む連鎖を変えていくには、他者の否定のみにとらわれない別様の關係性を探究していく必要がある。ハージのオルタ論は、まさしくこのような關係の可能性を経験的現実のなかに見出していこうとする、批判実践の試みなのである。